

さあ、勝負の夏が来るぞ。

この2か月が、本当の始まりである。やるべきことは定まった。1戦1戦全力で向き合うほかはない。テクニックも必要だ。駆け引きも必要だ。ただ、必ず勝利に近づく道を最短距離で走るほかはない。1日、12時間勉強するとしても、まだ12時間もの余裕がある。2か月という道のりを進むためには、これ位の余裕はまだあってもよい。

焦る必要はない。自分を駆り立てればよい。日本中の高校3年生が、浪人生が自分を見つめて毎日の時を刻んでいく。他人より何をもって上回るのかを意識すべきだろう。絶対量なのか、集中力なのか、質と量のバランスなのか、人それぞれに自分の特質をもって進むべきだ。

身体が小さいなら小さいことを生かして進み、休みがちなら休みがちな自分を生かしながら進み、体力があるならとことんまで自分を追い込んで、効率が大切ならこの1秒1秒にかけることに徹すればよい。

慌ててもう一度戻らなければならないような進み方ではなく、着実の1歩ずつ進むが良い。

あきらめが悪いのは、我々の特質だ。どこまでもこだわるからこそ、自分の道が開くと思え。しかし、受験の結果だけで生きれるとは思わないよ、入った大学の偏差値より、何をもってその後の人生を生きるかだ。

あの、3月11日の真っ暗な一夜を思い出せ。どうなるのだろうかという不安と心配と絶望に溢れていた日々を私たちは共有している。あそこから、立ち上がった私たちには、どんな苦労も困難も打ち破っていく術が身に付いているはずだ。

君子は豹変するのである。三日たつと刮目するものになるのである。ギアをセカンドに入れて、この2か月を戦うぞ。

教養という大きなすそ野の広がり、必ず私たちを救ってくれる。部活動を最後までまい進した自負が自分を支えてくれるのだ。目の前の数人が敵ではない。50万人が全国に散らばっている。その中から、第一志望と考えるのは、例えば、東大の理科1類だったら、1万人ぐらいだろう。合格者は千人ぐらいだろうから、10人の一人になるという計算だ。

それでは何をもって10人の一人となるか。ここに戦略があり、そのための戦術があるはずだ。その自分を見極めて、この2か月の達成目標を設定すればよい。

その目標への達成度を毎日点検することが、暑い夏の過ごし方だと考える。

